

柳家喬太郎の

ヨーロッパ

落語

道中記



柳家喬太郎

フィルムアート社

二〇一七年十一月十九日、正午。

一寸先すら予測不可能な落語旅、いよいよ後半戦。

波瀾万丈のアイルランドから英国へと到着。広大なヒースロー空港を抜け出て、チャーターバスで目的地ケンブリッジへ向かいます。

高速道路を一時間半くらい走ったあたりで車窓からの風景がどんどん変わり始める。まるで過去へのタイムトリップ。そして、ついにケンブリッジの街に入った途端、まるで魔法をかけられたように景色が変わった。ここは中世のヨーロッパか、と目を疑うばかりの光景。

この街はまるで、映画『ハリー・ポッター』の世界です。

ここで我々を待ち受けるのは、イギリスの最高峰の大学、世界に名だたる超エリート校。そう、皆さんよくご存知の、あのケンブリッジ大学、学問の聖地です。

とは言え、ケンブリッジ大学って、どんくらいすごいの？ どんな人が学んでいた

の？

何も知らないんで、バスの中でクララさんに聞いてみました。

出てくる卒業生の名前は、僕たちの小学校とか中学校の教科書に出てきた偉人たちばかり。古くは哲学者のフランシス・ベーコン、『種の起源』でおなじみの自然科学者チャールズ・ダーウィン、宇宙理論学者のステイヴン・ホーキング博士など、ありとあらゆる分野で活躍なさる学者さん、科学者さん、芸術家さん、政治家さんの名前が次から次へと。

ノーベル賞受賞者も数多く輩出しているとのこと。

しかも、喜劇集団モンティ・パイソンのメンバー、ジョン・クリーズ、グレアム・チャップマン、エリック・アイドルもこの大学出身。へえ、お堅いばかりじゃないのがふところが深い。

ご出身者のお名前を列挙してたら、この本が終わっちゃうと思いますので、おあと大勢さまつてことにしておきましょう。

さて、バスはケンブリッジ市内の石畳の路地を入り、この地の我々の宿、ダブルツリーbyヒルトンホテルケンブリッジシティセンターに到着します。僕らを招聘して



ケンブリッジ大学の学生の
メルさん、ジョアンさん、テシさん、ディディさんと。

くれたケンブリッジ大学の先生がお薦めする瀟洒なホテル。広い芝生の向こうの綺麗な川には水鳥が泳ぎ、なんともどかな気分に合わせてくれる。

さっそくケンブリッジの街を歩きましょうと、荷物を部屋に入れ、ロビーに出ると、ガイドを引きうけてくれた学生さんたちが待っていてくれた。陽気で可愛い四人の女の子たち。

テシさん、ジョアンさん、メルさん、ディディさん。皆さんはきちんと一礼して、リーダー格のテシさんがご挨拶。

「はじめまして、私たちはケンブリッジ大学の日本学の授業で日本語を学んでいます。まだ未熟ですが、がんばってご案内させていただきます」

なんて綺麗な日本語。四人の皆さん、みごとに発音で挨拶してくれる。

素敵なガイドに導かれ、足どり軽やかにケンブリッジ散歩が始まります。

夕食での会話

「イギリスはごはんが美味しくないんだよ」と、渡英経験者がよく口にする言葉がある。だから、全然期待しないでいたのだが、ところがどっこい、僕らがこちらで連れられて行ったお店やホテルの朝食は、どこも美味しいことこのうえなし。人の噂なんてあてにならないものだ。

ケンブリッジ四人娘が連れて行ってくれたお店もとびきり美味しかったなあ。

四人ともお嬢様なのでどんな店に行くのだろうと、旅の仲間も各々が財布を握りしめて想像してたんですって。高級レストランかしら、お財布の中身で足りるかかしら、なんてね。



プラスリーでのひととき。

ところがまあ、味は最高、値段は手ごろ。接客も良くてくつろげる、理想的なお店でした。

『Côte』というプラスリーは、レストランほど高くないけれど、レストランみたいに美味しかった。

みんなそれぞれに好きな料理を堪能しながら、ゆっくりとした日本語の会話を楽しみました。言葉が通じるところとは、とてもリラックスできるものですね。

「日本語のどこが好きなんですか？」と尋ねたら、テシさんから驚くべき言葉が返ってきました。

「えっと、日本語には、丁寧語、尊敬語、謙譲語があります。その繊細な気配りがとても好きです。だけでも、英語に訳すとその細やかなニュアンスが消えてしまいます。私はそれがとても悲しいのです」

どうよ。

ニッポンの若者よ、よく聴いてくれ！ ってことですよ。



寄せ書きをする女学生たち。

ケンブリッジのこの四人の女子は、それぞれ日本でホームステイをした経験もあるそうです。だから、日本のこともよく知っていました。良い印象しか聞いていないけれど、本当はどうだったんだろう。今の日本、心配なことが多いですから。それぞれ、東京、北海道、名古屋など、日本のいろんな場所に行ったことがあるそうです。

その中でも、東京の下町にホームステイしていましたというひとりに視線が集まる。

「あたし、赤羽」とメルさん。

正確には東十条らしいのだが、赤羽って響きが本人も気に入っているらしい。なんでも、築地市場で仕事をしているお宅にホームステイしていたのこと。

ケンブリッジのお嬢さまと赤羽。この組合せが意外で面白い。否が応でも盛り上がりますよ、こ



日本語でメッセージを書くメルさん。

のネタは。

「まさか、ホッピーとか呑んだことないよね？」
って聞いてみたら、なんと、「あります！」だって。
やるじゃねえか、メルさん。

このメルさん、サイン帳にみんなで寄せ書きを
した時にも、「いけね、英語間違っちゃった」つ
て呟いてたんだよね。

そういえば、カレッジを案内してくれた時も、
他の女の子の説明を我々と一緒に聞いていて、「あ
たし知らない、ふーんそうなんだ」って言ってい
ました。

東京の下町ギャルかよ。この親近感、嬉しくな
っちゃう。

ジョアンさんも、デイデイさんも、テシさんも、
ほがらかで人の話を良く聞いてくれるから、会話

が弾む。

正太郎くんが「日本文学で印象的な作品はなんですか？」と尋ねると、古典なら『伊勢物語』、近代現代なら谷崎潤一郎の『蓼喰ふ虫』と真面目な答えが返ってきた。そうかと思ったら、ムーチョと『源氏物語』の話で盛り上がっていて、どんな男の子が好き？　なんてガールズトークをしているではないか。

まるつきり文学好きの日本人同士の会話です。

そろそろ帰ろうという頃合い。

会話のシメに、お別れの時に使う「おひらき」っていう縁起言葉を四人に教えてあげたら、とても面白がってくれた。

さすがに大学では、ここまで教えないんでしょうね。しきりと「へえ」といつて頷いている。

彼女たちなら、落語に出てくる符牒ふじょうや職人言葉にも興味を持ってくれるかもしれないな。

ケンブリッジ大学での落語公演

午後は、いよいよケンブリッジ大学の落語公演です。

日本語学科の准教授モレッティ先生は、満面の笑みで迎えてくださった。とても気さくな女性です。聞くところによると、世界的にとっても有名な日本文学の研究者さんなんですって。

その先生が、ご自身で丁寧に淹れた日本茶でもてなしてくださいました。なんて言うん



ケンブリッジ大学では、
モレッティ先生が日本茶でもてなしてくれた。

でしょう、温度も香りもお味も驚くほどに優しい
んです。とても美味しかった。

そして嬉しいことに、モレッティ先生は落語フ
アンという。「運転しながら一席聴いているんで
すよ」と、ナチュラルにしゃべる日本語に温和な
人間味が感じられる。周囲をほっとさせてくれる
チャーミングなお人柄です。

モレッティ先生と大学のスタッフ、そして日本
からの我々も加わって、広い教室をみるみるうち
に落語会場へ仕立て上げます。

今回は、高座の高さも広さもばっちりです。

さて、本番。

この公演旅行中、落語や所作の説明や、演じる
落語の演目は、字幕の都合上、全部同じなのです



ハンバーガーの写真を使った仕草に関心を示す観客たち。



が、反応は各会場すべて違います。ケンブリッジ公演は、一番やりやすかったです。理解力や反応が、日本語でやっても通じたかもしれないと思うほどの感覚でした。やっているうちに自分が乗ってきたのを覚えていきます。四カ国のうちで唯一言葉の壁を感じなかったとも言えます。

他の大学ももちろん良かったけれど、何か頑張ってやり切ろうという気持ちで乗り切った感があったんです。ここは日本でやっている感覚と、とても近かった。

ま、しかし、こちらが気持ち良く高座でしゃべっていることと、お客様の感じることは違います。アイルランド同様、ババさんのレポートで案内いたしましたよう。

《回想》 ケンブリッジの『うどんや』と質疑応答 馬場憲一

ケンブリッジ大学での公演は、良く告知され、満員の客席でした。ケンブリッジ大学の学生、先生を中心に集まりいただきました。きのうガイドしてくれた女の子たちも熱心に聴いていました。